

中国における法華經疏の研究史について(2)

菅野博史

本稿は、かつて『人文論集』に掲載した拙稿「中国における法華經疏の研究史について」⁽¹⁾の続編である。そこには、次の十七点の著作を紹介した。

- (1) 山川智応『法華思想史上の日蓮聖人』(新潮社、一九三四年/淨妙全集刊行会、一九七八年)
- (2) 日下大癡『台学指針—法華玄義提綱』(興教書院、一九三六年/百華苑、一九七六年)
- (3) 塩田義遜『法華教学史の研究』(地方書院、一九六〇)
- (4) 佐藤哲英『天台大師の研究』(百華苑、一九六一年)
- (5) 横超慧日編著『法華思想』(平楽寺書店、一九六九年)
- (6) 坂本幸男編『法華經の中国的展開』(平楽寺書店、一九七二年)
- (7) 横超慧日『法華思想の研究』(平楽寺書店、一九七五年)
- (8) 稻荷日宣『法華經—乘思想の研究』(山喜房仏書林、一九七五年)

- (9) 丸山孝雄『法華教学研究序説—吉蔵における受容と展開—』(平楽寺書店、一九七八年)
- (10) 平井俊榮『法華文句の成立に関する研究』(春秋社、一九八五年)
- (11) 多田孝正『法華玄義』(大蔵出版、一九八五年)
- (12) 村中祐生『天台觀門の基調』(山喜房仏書林、一九八六年)
- (13) 平井俊榮『法華玄論の註釈的研究』(春秋社、一九八七年)
- (14) Paul L. Swanson, *Foundation of T'ien-t'ai Philosophy*. Berkeley: Asian Humanities Press, 1989.
- (15) Young-ho Kim, *Tao-sheng's Commentary on the Lotus Sutra: A study and Translation*. Albany: State University of New York Press, 1990.
- (16) 菅野博史『法華とは何か—「法華遊意」を読む—』(春秋社、一九九二年)
- (17) 菅野博史『中国法華思想の研究』(春秋社、一九九三年)
- 本稿では、その続編として、次の(18)から(31)の著作を紹介する。⁽²⁾

- (18) 菅野博史『法華玄義』(上)(中)(下)(第三文明社、一九九五年一月、一九九五年二月、一九九五年三月)
- 本書は、智顛・灌頂の『法華玄義』の訓読訳と注を示したものである。

- (19) 平井俊榮『統法華玄論の註釈的研究』(春秋社、一九九六年)

本書は、上記の(13)の続編であり、吉蔵『法華玄論』巻第五から巻第十までの訳注研究である。訳は、訓読訳である。これによって平井氏は、『法華玄論』の訳注を完成させた。

(20) 方廣錫編『藏外佛教文獻』第二卷(北京、宗教文化出版社、一九九六年)

本書は、敦煌で発見され、上海博物館に保存されている、『法華経』の注釈書である『法華経文外義』(pp. 293-354)の翻刻を含んでいる。⁽³⁾

(21) 菅野博史『法華義記』(大蔵出版、法華経注釈書集成2、一九九六年九月)

本書は、光宅寺法雲『法華義記』の訳注研究(訓読訳であるが、本邦初訳である)と解説を示したものである。

(22) 李志夫『妙法蓮華経玄義研究』(台湾、中華佛教文獻編撰社出版、一九九七年)

本書は、『法華玄義』に新たに句読点を施し、我々の本文に対する理解を助けてくれる。さらに、引用経論の典拠調査、内容の要約、重要な文の提示、コメント、テキストの説明、諸注釈の紹介、重要な語句の注、現代の学術思想に基づくテキストの思想的発展の説明、重要な漢語・梵語の索引を含んでいる。諸注釈の紹介は、中国・日本の重要な注釈を含んでいる。本書は、『法華玄義』の理解に大いに役立つと思われる。

(23) 菅野博史『法華玄義入門』(第三文明社、一九九七年七月)

本書は、『法華玄義』全体の入門的解説を示したものである。

(24) 菅野博史『法華統略』上・下(大蔵出版、法華経注釈書集成6、一九九八年三月、法華経注釈書集成7、二〇〇〇年三月)

本書は、『法華統略』の訳注研究(訓読訳であるが、本邦初訳である)と、日本名古屋の真福寺(大須観音)に保存さ

れている『法華統略』の良質な写本の翻刻である。『法華統略』は大日本統藏經に収録されているけれども、藥草喩品・授記品・化城喩品の三品の注釈を欠いていた。真福寺の写本は、この部分を含んでいた。

(25) 朱封鰲『妙法蓮華經文句校釋』（北京、宗教文化出版社、二〇〇〇年）

本書は、智顛・灌頂『法華文句』に対して、新たに句読点を施し、注釈したものである。

(26) 奥野光賢『仏性思想の展開——吉藏を中心とした『法華論』受容史——』（大蔵出版、二〇〇二年）

本書は、吉藏の法華経観を考察したものであり、当然のこととして、吉藏の法華経疏を研究したものである。著者は本書によって駒澤大学より博士の学位を授与された。本書の内容目次を紹介すると次のようである。

序

第一篇 吉藏およびそれ以降の『法華論』依用と仏性思想

第一章 『法華論』について

第二章 吉藏教学と『法華論』

第一節 吉藏における『法華論』依用の特色

第二節 吉藏の『法華論』依用の実態——七処に仏性有りの文をめぐって——

第三節 吉藏の「仏知見」解釈について

第三章 吉藏の声聞成仏考

第四章 吉藏と仏性思想

第五章 天台教学と『法華論』

第一節 天台における『法華論』受容—吉藏との比較において—

第二節 最澄の授記思想—『大乘十法経』を中心として—

第三節 円珍と吉藏—その『法華論』解釈をめぐって—

第四節 『二乗要決』における『法華論』解釈について—特に声聞授記を中心として—

付録一 『涅槃経』をめぐる最近の研究について—一闍提論を中心として—

付録二 最澄撰とされる『三平等義』について

第二篇 吉藏の思想形成についての考察

第一章 吉藏における「決定業転」をめぐって

第二章 吉藏における「有所得」と「無所得」—有所得は無所得の初門—

第三章 吉藏のいう「無諍」について

第四章 吉藏における四悉檀義

第五章 吉藏教学と『華嚴経』をめぐって

第六章 吉藏教学と草木成仏

本書は、二篇から構成され、全部で十一章から成る。第一篇「吉藏およびそれ以降の『法華論』依用と仏性思想」は五章から成る。第一章「『法華論』について」は、本書の中心テキストである『法華論』についての過去の研究史をまとめ、また著者の展望を述べている。

第二章「吉藏教学と『法華論』」は三節から成る。本章は、吉藏がなぜ仏性の思想を、彼の『法華経』解釈に持ち込んだのか、『法華論』のどこに仏性の思想を見いだしたのかを明らかにする。著者は、とくに『法華経』方便品の「仏知見」

に対する吉蔵の解釈の特色について論じている。

第三章「吉蔵の声聞成仏考」は、唯識学派がインドで四世紀頃に確立した五姓各別思想が吉蔵の思想にも見られるとす
る末光愛正氏の研究を批判したものである。本章と第四章「吉蔵と仏性思想」は、本書の中心部分である。著者は、末光
氏によって提起された仮説を検証し、吉蔵の思想にはさまざまな要素が含まれてはいるが、吉蔵は一切衆生が成仏できる
という立場を取ったと結論づけた。

第四章「吉蔵と仏性思想」は、仏性に対する吉蔵の理解を明らかにする。すなわち、「勝鬘宝窟」「来意門」を主要な資
料として、吉蔵の仏性理解は、すべての現象世界は真如から生起するという真如随縁的なものであるとする。著者は、こ
の点において、吉蔵の考えは、法相宗の真如は静止的なものであり、現象世界に生起してくることはないとする真如凝然
の考えと大いに相違していることを指摘する。

第五章「天台教学と『法華論』」は、四節から成る。本章は、智顛の『法華論』の具体的な依用を調査し、また智顛か
ら日本の源信まで天台宗において、『法華論』がどのように、あるいはどんな観点から『法華論』を依用してきたかにつ
いて論じる。また、本書は吉蔵との比較研究を含んでいる。

第二篇「吉蔵の思想形成についての考察」は、六章から成る。本篇は、仏性の思想を『法華經』の解釈に導入した吉蔵
の思想が、「決定業転」「空観」「草木成仏説」などの特定の問題を通してどのように発展したかを考察している。

(27) 菅野博史『法華經思想史から学ぶ仏教』(大蔵出版、二〇〇三年)

本書は、論文集であり、本稿に関連する三つの論文、「智顛は果たして法華經至上主義者か」「中国仏教における『法華經』」
「『法華經』の実践的思想―常不輕菩薩の礼拝行―」を含んでいる。

⑧ Shen Haiyan, *The Profound Meaning of the Lotus Sūtra: T'ien-t'ai Philosophy of Buddhism*, 2 volumes, Delhi: D K Fine Art Press P Ltd, 2005.

本書は、二巻から成る。第一巻は『法華玄義』と『法華玄義』のテキストに見られる天台の哲学の研究であり、第二巻は『法華玄義』全体の英訳である。第一巻の内容目次を紹介すると次のようである。

Acknowledgement

Foreword

Preface

Introduction

Chapter One: The Life and times of Chih-i as an Introductory Background

1. The Historical Background

2. The Life of CHIH-i

Chapter Two: The Achievements of the Profound Meaning of the Lotus Sūtra

I HOW DOES CHIH-I ORGANIZE HIS WORK *HSÜAN-I* TO INTERPRET THE LOTUS SŪTRA IN ORDER TO

PRESENT HIS SYSTEM OF THOUGHT?

1. The primary structure of the *Hsüan-i*— General Interpretation

2. The primary structure of the *Hsüan-i*— Specific Interpretation

3. The formula of Chih-i's field of discourse

4. Conclusion of the first issue in question

II. HOW DOES CHIH-I CONNECT HIS ALL-ENCOMPASSING THEORIES TO MAKE THEM COHERENT AND

COMPLETE, AND WHAT TECHNIQUE DOES HE EMPLOY TO MAKE THEM FLAWLESS AND
IRREFUTABLE?

1. Technique of polarity
2. A Technique of definition
3. A Technique of complete critique and evaluation of theories of others
4. A Technique of comparison
5. A Technique of describing exhaustive and comprehensive lists of various notions and concepts
6. A Technique of Sign Interpretation

Conclusion of the second issue in question

III. WHAT ARE THE THEORIES AND SYSTEMS CHIH-I FORMULATES TO DISPLAY THE CHARACTERISTICS
OF SYNCRETISM AS THE BACKBONE OF HIS PERFECT AND HARMONIZING PHILOSOPHY?

1. System of Classifying the Teaching of the Buddha
2. System of integration
3. System of weeding out the old and bringing forth the new

Conclusion of the third issue in question

General Conclusion

本書は、三つの問題とそれらに対する著者の解答から成る。第一の問題について、沈海燕氏は、「どのように智顛が、彼の思想体系を示すために、『法華経』を解釈する彼の著作『法華玄義』を組織しているかという問題は、テキストの体系

と内容に関して、その概観を提供するのに役立つ。これは、テキストの概略と全体の構造を描くことによって提供される。この問題を通じて、智顛が『法華經』を解釈するため、彼の思想を提示するために取る解釈学的なアプローチの全体的な描写が与えられる」と述べている。

第二の問題について、彼女は、「智顛がどのように一切を包含するという彼の諸理論を一貫した完全なものにするために、それらの理論を結びつけるのか、またそれらの理論を欠点のない、論駁できないものにするために、智顛がどのような技法を使うのか」という第二の問題は、六つの方法を検討するのに役立つ。第一に両極性の技法、第二に明確な定義の技法、第三に他者の理論に対する完備した批判と評価の技法、第四に比較の技法、第五に包括的で総合的なリストのさまざまな観念と概念に関する描写の技法、第六に記号解釈の技法である。これらの技法を通じて、智顛が彼自身の（救済論的意味を伝える）哲学的思索の観点から何を伝えようとするのかが明白になる」と述べている。

第三の問題について、彼女は、「智顛が定式化する理論と体系—智顛の円融の哲学の重要要素としてのシンクレティズムの特色を表示するものである—が何であるかという最後の問題は、認識論の観点、つまり中国の知識論を反映する智顛の提示に見られるシンクレティズムに関係する。この特色を明らかにする理論と体系は、次のように要約される。第一に教判の体系、第二に統合、第三に古いものを整理して新しいものを生み出す体系である。この問題を通じて、実践的な重要性を示す智顛の哲学の形成に関する第三の認識論的問題の観点が検討されるばかりでなく、教育的意味を前提とする解釈学的アプローチの第一の観点との関係や、救済論的重要性を持つ第二の観点も同様に解明される」と述べている。

筆者は、彼女の研究が天台哲学の研究を前進させることを疑わないが、日本の学者の研究成果をもっと参照してもらいたいと思う。というのは、天台哲学の学術的研究を遂行するためには、今や我々は『法華經』の解釈に関して、智顛と吉藏の関係を考慮しなければならない。たとえば、「絶待妙」と「相待妙」の二妙の用語に関して、我々は智顛の『法華玄義』と吉藏の『法華玄論』のいずれにも見いだすのである。⁽⁵⁾

- (2) Daniel Bruce Stevenson and Hiroshi Kanno, *The Meaning of the Lotus Sūtra's Course of Ease and Bliss: An Annotated Translation and Study of Nanyue Huisi's (515-577) Fahua jing anlexing yi*, Bibliotheca Philologia et Philosophica Buddhica, vol. IX, Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University, 2006.

本書は、南岳慧思『法華経安楽行義』の英文の訳注研究であり、Daniel Bruce Stevenson と菅野博史のそれぞれの研究論文、及びテキストの校訂を含む。本書の内容目次を紹介すると次のとおりである。

Preface and Acknowledgements

Abbreviations and Conventions

Part I: Daniel B. Stevenson, "Nanyue Huisi (515-577) — Recollections, Works, and Motifs."

Chapter 1: Nanyue Huisi in Buddhist History

Chapter 2: The Works of Huisi: Their Textual History, Filiations, and Problems of Interpretation

Chapter 3: Only Between One Buddha and Another: Huisi's Views on Knowing the True Dharma

Part II: Hiroshi Kanno, Huisi's Perspective on the *Lotus Sūtra as Seen through the Meaning of the Lotus Sūtra's Course of*

Ease and Bliss

Part III: Daniel B. Stevenson and Hiroshi Kanno, Annotated Translation of Huisi's *Meaning of the Lotus Sūtra's Course of*

Ease and Bliss

Part IV: Hiroshi Kanno, Corrected and Punctuated Edition of the *Fahua jing anlexing yi*

Bibliography

『法華経安楽行義』は、『法華経』の随文釈義の注釈書ではなく、明確なテーマとしてとくに安楽行、つまり『法華経』の安楽行品第十四に説かれる安楽行に集中する著作である。『法華経安楽行義』に対するステイブンのアプローチは、慧思が活動した歴史的環境に特有な仏教の思想と実践の潮流にさらに注意を払いながら、慧思の現存する著作全体というより大きな枠組のなかに、テキストの内容と修辭を位置づけようとするものである。

菅野の研究の観点は、主に中国中世初期の『法華経』の注釈書の一例としての『法華経安楽行義』に対する関心から生じたものである。⁽⁶⁾

(30) 菅野博史『法華文句』(Ⅰ)(Ⅱ)(第三文明社、二〇〇七年六月、二〇〇八年九月)

本書は、智顛・灌頂『法華文句』の訳注研究(訓読訳)であり、全四冊の予定である。

(31) 陳堅『心悟転法華—智顛「法華詮积学」研究』(北京、宗教文化出版社、二〇〇七年)

本書には、第二章『法華玄義』中の詮积方法…『五重玄義』、第三章『法華文句』中の詮积方法…『消文四意』が含まれ、それぞれ『法華玄義』、『法華文句』の經典解釈方法について考察している。

〔付記〕筆者は、呉汝鈞『法華玄義の哲学綱領』(台北、文津、二〇〇二年)など、最近の台湾の研究書をまだ入手していないので、いずれ機会を改めて紹介したい。

(1) 『創価大学人文論集』六、一九九四年三月、pp. 60-66を参照。

- (2) (1)から(2)までの著作の紹介は、すでに英文で発表したことがある。Hiroshi Kanno, "A General Survey of Research Concerning Chinese Commentaries on the *Lofus Sutra*" (創価大学国際仏教学高等研究所年報] 10 (二〇〇七) pp. 417-444) を参照。
- (3) 拙論『法華経文外義』研究序説(『印度学仏教学研究』55-1、二〇〇六年十二月、pp. 49-492) を参照。『法華経文外義』は、『法華経』の随文釈義の注釈書ではなく、『法華経』に関する重要な問題を取りあげ、問答形式で考察する注釈書である。この写本は、奥書によれば、五四五年に書写されたものである。したがって、五四五年以前に成立したことは言うまでもない。『法華経』の中の注釈書を研究するうえでとても重要な資料である。拙論は、『法華経文外義』の概略を整理したものである。
- (4) 末光氏は、一九八七年から「駒沢大学仏教学部研究紀要」と「駒沢大学仏教学部論集」とに十編の論文を発表した。とくに、「吉蔵の成仏不成仏観」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』45、pp. 275-291、一九八七年三月) を参照。
- (5) 菅野博史「中国法華思想の研究」(春秋社、一九九三年) 545-559頁を参照。
- (6) 菅野博史の論文は、日本語でも発表されている。『法華経安樂行義』の研究(1)、『東洋学術研究』43-2、二〇〇四年十二月、pp. 176-195)、『法華経安樂行義』の研究(2)、『東洋哲学研究所紀要』20、二〇〇四年十二月、pp. 53-81) を参照。